

女子に関する衣服の研究 I

—— 女子におけるズボンの一考察 ——

A Study of Women's Dress I

—— A Study of Women's Slacks ——

北 村 悦 子

Etsuko KITAMURA

I は じ め に

ズボンの語源は仏語のジュボン (Jupon) に由来するもので、英語ではトラウザーズ (Trousers), 米語ではパンツ (Pants), 独語ではホーゼン (hosen) と意を同じくし、二本の脚からなる人体の下半身を腰から脚部にかけて左右別々に包む形の下体衣のことである。

衣服の始まりは人類が地球上に現われた時代から始まり、その初期は動物の皮革や植物の樹皮を身にまとふことから始まって、時代の変遷とともにそれが織布に変わった。

その後は腰に布を巻くスカート状のものに移り、ズボンはそれ以後に現われたと思われる。

女性のズボンに名称がつけられて一般的に用いられたのは、19世紀中ごろになって二人の女性によって改革運動がなされてからである。

様々なスタイルのファッションが生まれてそして消えていく昨今、数年前までは女性の間でスカート派が圧倒的多数だったが、今日では女性が社会的な自立を理想として進出した結果、ファッションの大衆化がなされ、現在注目されるアイテムの一つにあらゆる種類のパンツ・ルックが生まれ導入された。それはその場の環境に適合させた着こなしが容易であること。

またディタイムのものからソワレに至るまで着用が広範囲になったことで、パンツの氾濫といっても良いくらい再び脚光をあび始めた。

いわゆるファッションナブルな時代性やイージーでスポーティな着こなしが、現代生活にうまく適合するからだと思われる。

本研究では女性におけるズボンが今日に至るまでの過程をたどり、方法としては文献・資料にもとづき起源・変遷・種類について考察し、それらのことを考慮したうえで現代に着用できるという目的でフォーマルなパンツ・ルックを製作したので、その研究結果を記述する。

II 変 遷 と 考 察

1. 起源および古代から中世にかけてのズボン

ズボンは古代ペルシャ人であるスキタイ人、モンゴル人などの民族によって紀元前古くから用いられたと思われる。

起源を地域的にみると、ユーラシア大陸を斜に横断する砂漠と高原で、この地帯に住む民族は遊牧移動したり、騎馬の使用といった特殊な条件下にあることと、また酷寒酷暑からの保護¹⁾など、厳しい生活環境に対応するための必要からズボンが創造された。

縄文期末にはその時代を代表すると思われる亀ヶ岡土器（青森県の亀ヶ岡遺跡）が発見され、その中の土偶の腰に刻まれた彫刻文様をみると短袴式のズボンを表現している。

ペルシャのアカイメネス朝時代（紀元前8世紀から4世紀）の女子は男子と余り変らないコートないしチュニックとズボンを着用していて、それは純然たる騎馬服スタイルであった。

中国の紀元前8世紀ごろの文化はエジプト、ギリシャ、ローマなどヨーロッパ文明の影響を受けて急速に発展し、戦国時代の終りごろには騎馬戦に便利な胡服が取り入れられた。

それは北方胡服に共通する寒帯服として包被性に富む上衣とズボンさらにその上にはコートも用いられた。

紀元前4世紀ごろ南ロシアのスキタイ古墳から出土した銀製の壺に描かれた浮彫りには、スキタイ人夫婦の語らいの様子が刻まれているが、その服装は男女同型でいずれも膝上丈の短い筒袖の上衣とタイツ式の細長いズボンをはいているのがみられる（写真1²⁾）。

紀元前3世紀ごろには朝鮮半島に大陸文化の影響が現われ始め、その衣服も北方寒帯型なために、袖口の狭い上衣と防寒上の必要からズボンを着用していた。それはユーラシア系民族の衣服に共通しているものと思われる。

紀元前2世紀から2世紀にいたるクッシャン王朝の文化はササン朝ペルシャの前身をなしたイラン系遊牧民文化であった。

この時期にカーブルの北方60キロの地点にあるベグラム遺跡から宝物が出土し、遺物の中には明らかにクッシャンで製作されたと思われる岩石があり、それに浮彫りされている服装をみ

写真1 スキタイ人の男女（B. C 4世紀）

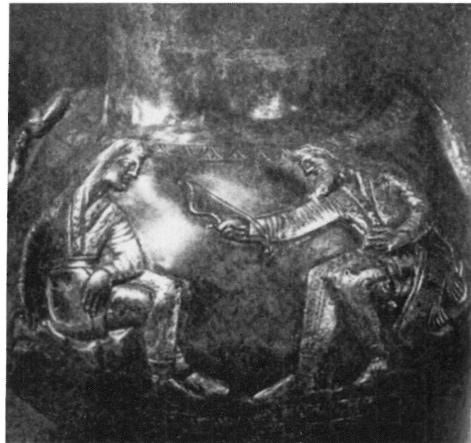


写真2 菩薩をかこむ供養者（B. C 2世紀頃）



写真3 女子の奴婢（前漢時代）

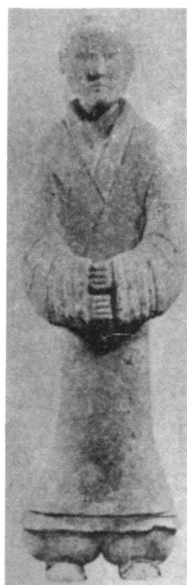


写真4 騎馬胡服の婦人像（唐時代）



ると、女子は丸首の貴頭型の上衣に太い余裕のあるペルシャ式ズボンをはいて、中央の菩薩をかこんでいる様子がうかがえる（写真2³⁾）。

写真3³⁾は前漢時代の灰陶俑にみられる女子の奴婢であるが、この時期の服装も膝丈の上衣にズボン状の下衣を着用している。

唐代にはいと女子に乗馬の風習がみられ写真4⁴⁾には騎馬胡服が着用されていて下衣はズボン状のものであることが確認される。

ササン朝時代に入り一枚の飾皿からその時期の服装を推察すると、描かれている内容は狩猟の様子であるが男女共比較的ゆるみの多いたっぷりしたズボンを着用しているのがうかがえる（写真5⁵⁾）。それは本来の防寒のためではなく、暑さに耐えることと宗教的な意義が加わった結果と思われる。

サラセン文化期では服装が完全に宗教的意味をもつようになったが、それによって権力階級の刺激や、女装を乱す悪い風習はみられなく、この時代の女子は美しい織物のやや短めのチュニックにゆるみの多い長いズボンを着用しヴェールを使用しているのが見られる（図1⁶⁾）。

このズボンはアラビア語でサラールウィル（Sarāwil）、ペルシャ語でシャルワール（Sharwāl）、（腰のあたりはゆったりしていて

写真5 狩猟中の男女（ササン朝時代）



足首で細くなったズボン) とよばれイスラム文化圏の特徴であり、男女ともに用いられ素材は絹、麻、綿などが使われ、柔らかいサテンのものは女性の外出着として着用されたが地方によっては女性のみに限られるところもあった。

ロマネスク時代は十字軍の遠征がいろいろな分野に影響し、服飾にも量と質の両面から向上を与える契機となった。

さらに封建制度のもとでは服装は社会において身分の違いをはっきりあらわし、女性は一枚の肌着と袖のついた一枚の表着を着用した。

ゴシック時代には裕福な市民達はしだいに遺族の衣服を模倣し、また貴族達は市民の衣服を取り入れて階層によって衣服を制限することはなくなった。女性の服装はシルエットが身体にフィットしていて、そのため着脱にボタンが必要となり重要視された。

この時期にはベルトが魔力を持っていると考えられていて細いウエストを強調するという意味からも用いられた。

2. 近世・近代のズボン

ルネサンスの時代はあらゆる階層の人達が派手に着飾った時代で、16世紀はスペイン宮廷モードがヨーロッパの典雅の象徴として流行を支配し、すべての衣裳にはスラッシュや飾り紐の手法が用いられた。古典的な貴族服の場合でも大柄な花模様を大胆に施した豪華なブローケードをたっぷり襲取りして、シルエットは全体に丸味をおび露出的でイタリアン・モード感覚をみせている。このころのヴェネツィアの貴婦人は、たっぷり襲寄せしたスカートの下にニット製のズボンをはいていた(写真⁷⁾)。それは膝丈で、はぎ合わせ手法とスラッシュの手法がなされて、さらに刺繍飾りなどが加わってその美しさが強調されている。

時代を同じにして活躍したフランスの王妃であったカトリーヌ・ド・メディシスはクレタの服装に似た様式をフランス宮廷にもたらし、彼女は贅沢な装飾を施して鑑賞に価するほどのズボンを着用した人物である。

バロック時代に入ると今までのスペイン宮廷モードに代わって新鮮な市民服の発達がみられ急速に軽快なものになり、きゅうくつな型、奇

図1 サラセンの女性



写真6 ヴェネツィアの貴婦人(16世紀)



妙な型だったものが宮廷芸術に奉仕する様式になった。17世紀初頭におけるイランの女性画をみると、まくり上げたスカートの下には精密な組み合わせ文様のズボンを着用しているのが表現されている（写真7⁴⁾）。これは“千夜一夜”の時代を彷彿させるものである。

17世紀後半にはフランスモードがヨーロッパのモードをリードする立場となり、ヴェルサイユ宮廷を中心に王侯貴族たちの社交生活が華やかに繰り広げられ、劇場などは新しいモードのコレクションの場所ともなった。

ロココ期はバロック時代に比較すると全体にシルエットは柔らげられその材質も色調の明るい絹物が好まれた。またこのころにはパニエが様々な形を変えてモード界を代表し、服装が芸術に近づいた時期でもあった。

エンパイヤー時代は婦人服の世界ではパリが流行のリーダーであり、1805年には下衣としてパンタロン（Pantalon）がローブと組み合わせて姿を見せている（写真8⁹⁾）。

これはもともと英国でパンタレッツ（Pantalets）と呼ばれた下着であったが、その後裾にフリル・レース飾り・刺繍などをしてスカートの下に見せて装うことが最上のエレガントとみなされて1809年ごろにペルカル製（密に織られた平織綿布）のパンタロンとしてパリで流行した。写真9⁵⁾、写真10⁵⁾の子供服をみるといずれも裾にフリル飾り、レース飾りが施されたパンタ

写真7 イランの女（17世紀初期）



写真8 裾にフリルのついたパンタロン（1805年）



写真9 パンタロンを装うパリジェンヌ（1810年）



ロンを着用している。子供達のこのような服装型態は1850年ごろまで続いた。

1810年代には膝の位置でびったりつく筒状の木綿製の長ズボンが現われその後は素材が絹製に代わった。

ロマンティック時代に入ると、あらゆる階層の女性が長ズボンをはくようになり、この時期には古代風モードを復活させた上下セパレーツの長ズボンも現われたがそれは歩行中に片側がずり落ちるということで不都合なために継続しては用いられなかった。

写真10 ナサソン家の人々（1818年）



写真11 幼年時代の遊歩場（1820年）



この時代の子供達の遊びの風景をみてもほとんどが裾飾りのついたズボン姿である(写真11)⁵⁾。それらの素材は遊び着であるため洗濯が容易なもので形は単純であるが大人と同型である。

一方婦人服は、ロンドンとパリの間にはあまり違いはなく服装雑誌も数多く発刊されて服飾界にも貴重な資料を提供していた。

1840年ごろフランスでは男子のリオン族に対して、リオンヌ（Lionnes）またはタバジューズ（Tapageuses）と呼ばれる伊達女族が現われ、夫と同じように乗馬服を着て槍騎兵のように乗馬したことが機会となってズボンがトップ・モードとして登場した。

写真12¹⁰⁾はその伊達女族の一人で、円周5メートルもあるスカートををはき、ローブは胸を締め、袖は広いものであり、ズボンはかなりゆるみの多いもので膝下で結び止めをしている。

クリノリン時代に入った1850年すぎごろから反クリノリンを標榜する勇敢な婦人の声が聞かれ始めた。フランスの社会主義者であるサン・シモンの思想を受けつぐサン・シモン主義者が、男女同権を女子の服装改革に取り入れてズボン着用を提唱し、またアメリカでは、アメリア・ブルーマーが、女権尊重ということで婦人解放運動をとおしてズボンの着用を提唱した。

ブルーマー夫人はアメリカの日刊雑誌「リリィ」の編集者でもあり、当時の女性としては先進的な人物であった。

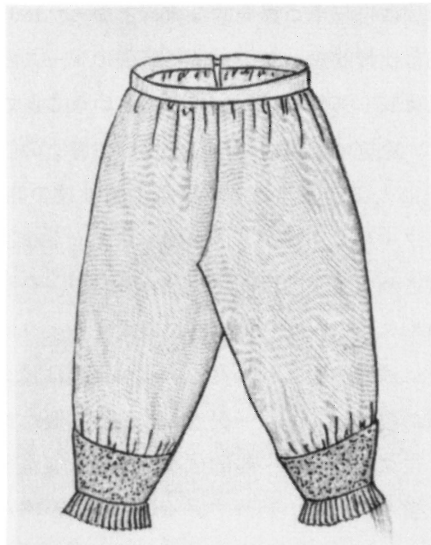
ブルーマーズ¹¹⁾（図2）はエリザベス・スミス・ミラーによって発表され、それをブルーマー夫人がイギリスで紹介したところたいへん反響があり、その後逆輸入の形でアメリカに取り入れられたものである（写真13¹¹⁾）。

1851年にブルーマー夫人によってクリノリンの下半分が切り落とされ、膝までのスカートにトルコ風のズボン・スタイルという改良服が発表された（写真14¹⁰⁾）。

写真12 ズボン姿の女 (1831年)



図2 ブルーマーズ (1851年)



その目的は今までつけていたコルセットをはずし女性も男性と同じようにズボンをはくということであり、社会における女性の地位の向上と婦人服の合理化・実用化であって、女子服の近代化がみられた。

それは労働階級や長いスカートに不便を感じていた女性達に深い感動を与えるものであった。その後、彼女は42年間にわたり改良服に情熱をかけたが当時のモードの趨勢には抗し得ず、

写真13 ブルーマーズをはく女性 (1851年)



写真14 改良服 (1851年)



反自然的なものとしてしか取り扱われなかった。彼女の改良服が再び雑誌に取り上げられたのは女性の間に自転車爆発的な流行となった1895年のバスル時代であった。

写真¹²⁾15は比較的短いスカートに麻製のレース飾りのついたズボンはいてる少女達であるが、これはレース飾りがついているということで上流階級の子供達である。そのようなズボンを買えない家庭では母親が白麻を用いて膝丈の筒形に仕立てただけのズボンを与えていた。

19世紀に入ると一部の上層階級の女性達の間にはスポーツ（狩猟・乗馬・テニス・クリケット・ゴルフ・サイクリング・水泳・スケートなど）が流行し、それぞれにふさわしいスポーツ服が考案され女子服の機能化がなされたが、それにとまってズボンも生活上必要となり、女性達は新型スポーツ服を積極的に着用するようになった。

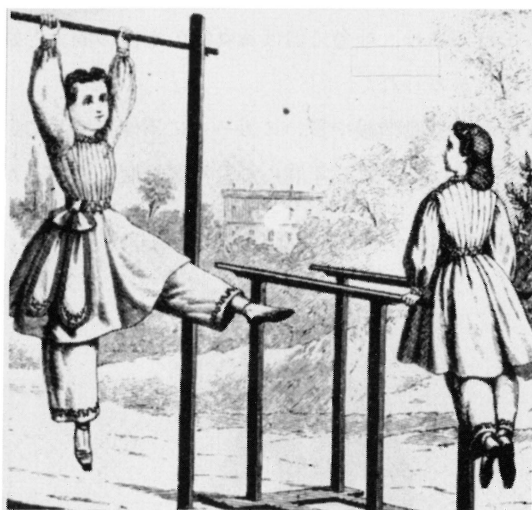
写真¹³⁾16は鉄棒を楽しむ少女であるが服装は膝丈の上衣と裾に飾りのついたズボンを着用して、その姿はブルーマー夫人の改良服に似たものである。

しだいにスポーツが一般的になり中でも海水浴が流行し、1824年にはド・ベリイ公爵夫人が最初に水着を着たといわれている。¹⁴⁾海水浴が盛んになるにつれて女性の服装は、花びな模様で飾られ、袖は短く胸元が大きく開いた上衣と、膝のところまで下るゆるみの多いズボンであっ

写真15 ズボンをはく女の子（1853年）



写真16 スポーツをする少女（1864年）



たが、それは着用目的より優雅さにポイントがおかれた。

写真⁵⁾17は水着の広告であるが、胸にはリボンが飾られトリミングが施され、裾、袖口にはブリーツがとられて街着と変らないデザインである。写真⁸⁾18は19世紀初めての水着である。

1893年にパリのバッファローにおいて、初めてフランス風の自転車競争が開催されたが、自転車に乗る女性の服装は、小さな羽根飾りのついたアラ・カノッティエラ（麦わら帽）というサイクリング用の帽子をかぶり余裕のあるズボン、それはニッカー・ボッカーズ（ゆったりした膝下丈で裾を絞ったズボン）を着用している（写真¹⁵⁾19）。

ニッカー・ボッカーズの原型はブルーマー夫人が反クリノリン服として創案した改良服に由

写真17 水着の広告（1880年代）



写真18 19世紀初めの水着

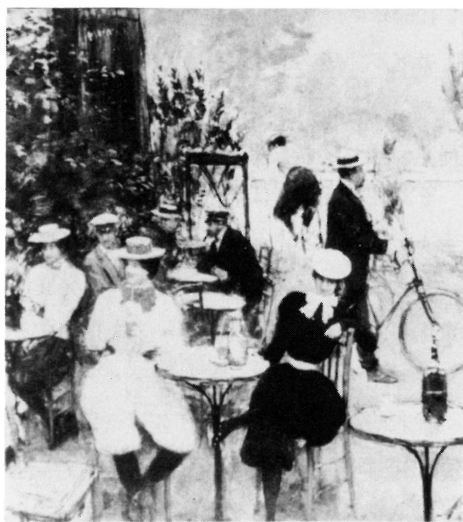


来している。写真20も自転車小屋での様子であるが、これらからもサイクリング・ウェアの統一制が見られる。

写真19 サイクリング用の服装（1895年）



写真20 ブローニュの森の自転車小屋（1900年）



3. 現代のズボン

20世紀に入ってスポーツ的な特色がモードの全領域に浸透し、若い世代の女性に大きな影響を与えた。その中でもポール・ポワレは単純でより着やすい服装ということで、コルセットを追放し女性の脚をスカートから解放することを考え1911年にはハーレム・パンタロン（柔らかいドレープのあるパンツでトルコ人のズボンからヒントを得たもの）を発表した。

当時彼は「つぎの世代の女性はズボンを¹⁶⁾はくであろう」。といって、現代のパンツの流行を

予言した。

第一次世界大戦を契機に女子にも外に出て働く機会が与えられ、経済的にも職業をもち自由を謳歌することができ服飾の世界とくに女子服が飛躍的に前進したと推察される。

この時代にズボンは女性の衣類として前世紀にもまして必要なものとなり、多様性が要求され取り入れられた。

パリの女性は、おしゃれな一つのフォルムとしてズボンを着用し、街には女性ズボン専用店が出きたほどである。

1925年にはセラー・スボン（水兵や船員が着用するズボンで腰はフィットして膝下が広がったズボン）が流行した。それに似たシルエットのものが写真¹⁵⁾21に見られる海浜着としてのズボンであり、そのままで街着として取り入れられるほどに現代的である。

我国では1943年ごろ女性の間で、当時の標準服であったモンペ・ズボン（全体にゆるみが多く裾口が細いズボン）が着用され始めた。その素材は木綿、サージ、コールテンなどで、外出用には絹も使用された。現代のズボンと比較するとカッティングは特殊であるが、シルエットはハーレム・パンツ（ゆるみの多いシルエットで足首部分にギャザーを入れてびったり締めたもの）に似た形態である。また前述したイスラム教圏の民俗服であるシャルワールとも共通していると思われる。

1954年には映画「麗しのサブリナ」でオードリー・ヘップバーンがはいたことによって、トレアドル・パンツ（足首より短めのびったりしたパンツ）が流行し、またこのころから数年間にわたりごく細身のシガレット・パンツ（紙巻き煙草のように細いパンツ）、マンボ・ズボン（裾幅が約15センチの細いズボン）などが全盛した時代であった。

それらは近年では素材が多種になりスカート・オン・パンツ（パンツの上にスカートを重ね着する方法）という新しい着装形態が取り入れられているのが、懐古調とも思われる。

さらに1960年後半に入ると経済の発展に伴う女性の社会的な進出とともにファッションが大衆化し、ファッション・ニーズを指向するようになった。この年代にはポール・ポワレにつづくデザイナー達によってパンツ・ファッションが次々に発表された。

代表的なのがアンドレ・クレージュのパンタロン・イブニング（図⁹⁾3）、パンツ・ルック（写真⁷⁾22）、ココ・シャネルのパンタロン・スーツなどがある。

時期を同じくしてジーパンが流行し始め、1970年代にはイブ・サンローランが積極的に取り扱ったパンタロンと並行するように大学のキャンパスなどあらゆる場所でジーンズの着用が広がった。

ジーンズは1850年ごろアメリカ西部の炭鉱労働者がホロ馬車に乗って仕事中、馬車のホロを切り取り手縫いで作ったのが始まりとされている。

1970年に欧米では家庭着ファッションとしてハーレム・パンツが着用されたが、最近ではこれがリゾート・ウェアやアフタヌーン・ドレス、イブニング・ドレス用として広範囲に見られ、パンツ・ルックが定着してきたために、さまざまなスタイルが現われて、スポーツ着とし

写真21 海浜着 (1930年)



図3 パンタロン・イブニング (1963年)

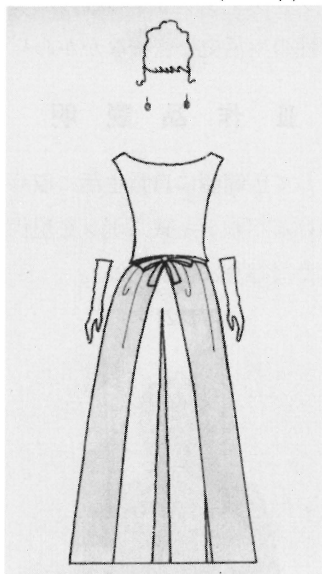


写真22 パンツ・ルック (1964年)



てではなく街着として本格的に着用され始めた。

この時代の前半にはシティ・パンツ (裾の広がった形で街着用のパンツ), ヒップボーン・パンツ (腰骨にひっかけたような感じに着るパンツ), ガウチョ・パンツ (膝下丈で裾広がり of the pants), ホット・パンツ (膝上まで露出した短いパンツ) などが流行し, またサスペンダーとパンツ・ルックの組み合わせも好まれた。

後半には実用的なオーバー・オール(上下つながっていて衣服の上に着るズボン型式の外衣), ジャンプ・スーツ (上下ひと続きになったパンツ), さらに以前のスリム・パンツも再び脚光をあびた。

1980年代は, ニューパンツ・ルック時代でバリエーションも豊富になった。それらを大別するとスリムなものとワイドなものになり, デテールとしてはギャザーやタックを施したウエストマーク扱いが新鮮で丈もシルエットも多様化の時代である。

代表的なものとして, ハイウエスト・パンツ (自然のウエストラインより上の位置から始まったパンツ), テーパード・パンツ (腰から裾にかけてしだいに細くなったパンツ), ストレート・ステム・パンツ (足のつけ根から裾まで同じ太さのパンツ), ペダル・プッシャー (自転車のペダルが踏みやすいように全体が細く膝下までのパンツ), ワイド・パンツ (幅広のゆったりしたパンツ), パラッツォ・パンツ (ゆったりして裾口にさらにフレアーが入ったパンツ), ワイド・バーミューダー・ショーツ (幅広のゆったりした膝上丈のパンツ), ニッカー・ボッカーズ (ゆったりした膝下丈の裾口をしぼったパンツ), スターラップ・パンツ (裾に足裏にかけるバンドが付き, 伸縮性素材を使用していて脚にフィットするパンツ), ジョド・パーズ (腰部はゆったりして膝下から足首にかけてフィットしているパンツ), このパンツは英国のクラ

シックな乗馬スタイルを思わせるものである。

19世紀後半から現代に到るパンツ・ファッションの推移にはその時代のさまざまな諸問題、社会情勢などが関与しつつまた女性の生活史と密接なかかわりをもちながら今日にいたった。

Ⅲ 作 品 説 明

今日におけるズボンモードとして広範囲に日常生活に取り入れられているが、そのような状況を把握したうえで、古代におけるペルシャ式ズボンを現代風にアレンジし、フォーマル・ウェアをデザインして製作をした（写真23・24・25）。

写真23



写真24



写真25



1. デザイン

全体のポイントとしてはパンツに女性的な優雅さを表現し、さらにボリューム感を出したことで上着は小さめにまとめた。

パンツのウエスト部分と裾部分に均等にタックを入れふくらみを出した。ゆるみの多い腰周り寸法は約2メートルである。

裾にはビーズとスパングルを施したカフスを用い、その下にはプリーツをたたみエレガントに仕立てた（写真26）。

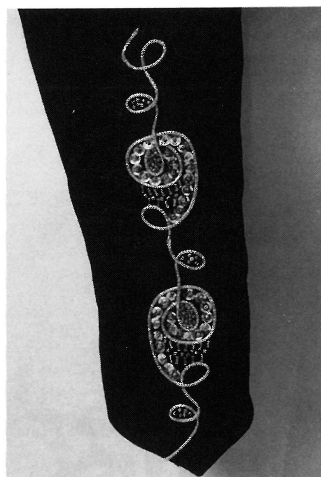
上着はスペンサー・ジャケット風に丈を短くし、ヘチマカラーは細めにシャープなシルエットを表現した。

袖は袖山と袖口に深いタックを取り袖丈は手の甲にかかる長さにした。

写真26 パンツ裾部分



写真27 袖口部分



カラー、袖口部分、サッシュベルトにはシルバー色の人八でコード刺繍をし、シルバー色のビーズとスパングルを施して華やかさを加えた（写真27）。写真28は刺繍の拡大部分である。

上着の後中央にはスラッシュを入れ、カラーと同素材で造花を作り中心にビーズをちりばめアクセントに止めつけた（写真29）。

トップは前中央にシャーリングを扱い、その縫い目部分にはビーズとスパングルを止めつけ、折り返した部分には上着のカラーと同様に刺繍を施した（写真30）。

写真28 刺繍の拡大部分

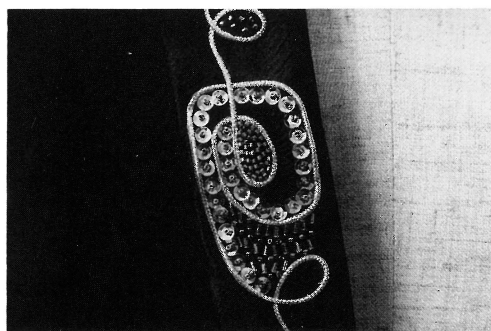


写真29 造花部分

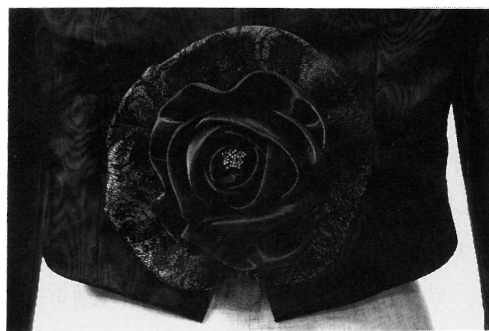


写真30 トップ拡大部分



2. 素材

パンツ・トップ共にシルバー系のラメジャガード（レーヨン98%，シルク2%）を使用。
上着は黒のモアレタフタ（ポリエステル100%）を用い、カラー部分、トップの折り返した部分、サッシュベルト、造花には黒のサテンシャンタン（ポリエステル100%）を使用した。
その他装飾として、人八、ビーズ、スパングル、チュール（造花部分に使用）である。
色調はモノトーンで全体をまとめた。

Ⅳ ま と め

女子におけるズボンについてその起源と変遷、作品製作を行なった結果を総括しまとめる。

ズボンは古代の狩猟民族や農耕民族の中ですでに衣服として用いられ、中世紀初期のサラセン人は、現在でも見られるようなゆるみの多いたっぷりしたズボンを着用していた。

それは砂漠の熱風に耐えることと宗教的意義が加わったものと思われる。

19世紀初めにはパンタロンが取り上げられたが、それは英国でスカートの下にはく長いズロース形の下着としてはかれたのが始まりで、その後フランスに導入され裾にはレース、フリル、刺繍などが装飾され、スカートの下から見せる着装形態になり、下着としてではなく独立した衣服となった。

実際にそれが普及したのは19世紀に流行したスポーツとスポーツ服の発達によるものである。

19世紀中ごろにはフランスやアメリカでブルーマー主義に代表される女子服の簡素化と男女平等意識の高揚が促進されて一種の社会運動となった。

ズボンは20世紀に入り女子の活動が増大するにつれて非常に速さで形態を変えながらさらに普及し、ズボンの実用性を認識し積極的に用いるようになった。

何もかもがファッションとして許容されるようになった現代において、ズボンは女性の衣服として不可欠なものになった。

ズボンはスカートに比べて保温性も高く、両足を別々に包んでいるため機能的、活動的であり、デザインによって着用の目的、役割を充分に果たしてくれる衣服と思われる。

ズボンがパンタロンの名を冠して女子服のワードローブの一つに加わり、ズボン型式の衣服が家庭着やスポーツ服の分野だけでなく、街着や職場服としても通用するようになって約20年の歳月が流れ、パリのオート・クチュールにおけるズボン型式の作品は多くのデザイナー達によって、ますます優雅さが加えられ、数多くのバリエーションが生まれた。

現代のファッション・ニーズに適したズボンは多くの女性が様々なデザインにより、カジュアルなものからフォーマルなものまで、幅広く着用されるようになったが、これからもパンツ・ファッションの造型的なバランスを充分考慮して、機能的にあくまでも女性らしくエレガントにそしてファッショナブルに着こなして欲しいものである。

今後は女性における服装がどのように変化し、また着用されていくか興味深く追求し、技術

的な技法についても調査研究を続けて行きたいと思う。

おわりに筒井京子教授のご退任にあたり、長い間、御指導いただきましたことを心より深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 丹野 郁：総合服飾史事典，雄山閣出版株式会社，1980
- 2) 河鱒実英・野村久康・佐藤潔人：世界服飾文化史辞典，東京堂出版，1973
- 3) 杉本正年：東洋服装史論攻 古代編，文化出版局，1979
- 4) 石原俊明：目で見る大世界史，国際情報社，1968
- 5) フランソワ・ブーシェ：西洋服装史，文化出版局，1973
- 6) 丹野 郁：服飾の世界史，白水社，1985
- 7) 村上憲司：概説 西洋服飾史，関西衣生活研究会，1982
- 8) 丹野 郁他：絵による服飾百科辞典，岩崎美術社，1971
- 9) 千村典生：ファッションの歴史，鎌倉書房，1969
- 10) 村上憲司：西洋服装史，創元社，1967
- 11) 青木英夫・メイ S・青木：目でみる女性ファッション史，衣生活研究会，1975
- 12) ジェームズ・レヴァー：西洋服装史，大日本印刷株式会社，1973
- 13) Millia Davenport：The book of Costume, vol 1 New York Crown, 1948
- 14) パスカル・セッセ：服飾の歴史，精興社，1964
- 15) ミラ・コンティニー：ファッション古代エジプトから現代まで，講談社，1971
- 16) 田中千代：服飾事典，同文書院，1973
- 17) 石山 彰：古代服飾文化史，デザインセンター，1956
- 18) 石山 彰：日英仏独対照服飾事典，ダヴィット社，1972

(1988・9・19)